

# 【沖縄】

## 沖縄やんばる3村による 持続可能な地域づくりの取組み

地 域 : 沖縄県・沖縄島北部（やんばる）

実施主体 : 沖縄県国頭郡大宜味村、東村、国頭村の

地域づくり関係者（行政機関・事業者・NPOスタッフなど）

報 告 : ESD-J 理事 大島順子



### 1. はじめに

気候の大部分が亜熱帯を占める日本列島の南、南西諸島の内琉球諸島を占める地域にある沖縄島のやんばる地域（沖縄島北部の3村：大宜味村、東村、国頭村）は、多様性豊かな自然環境を持つ亜熱帯の森とサンゴの海に囲まれた地域です。

亜熱帯海洋性気候が育む自然と中国大陸から渡ってきた動植物が生息し、中国との交流から琉球独特の文化が育まれてきたユニークな地域と言えます。

また、ひとび森の中に入ると都会人が羨むほど希少な生きものたちに出会う機会が驚くほどあり、自然の恵みを生かした地域の生業（農林漁業）の営みと深いいかかわりを持って継承されてきた個性豊かな伝行事が、後継者不足の問題を抱えながらも今の生活の中にきちんと残っている場所でもあります。

しかしながら、様々な人間活動の影響は、徐々に固有の生きものの生息環境を脅かし、このままではその生息が危機に瀕する状況まで陥ってきています。そして、地域の資源を活かしたレクリエーションやツーリズムの活動による自然環境へのマイナス面が指摘されるようになってきました。

沖縄島の面積3割弱を占める北部の3村が、地域の資源を守り活かしながら暮らしていくとはどういうことなのか、持続可能な地域とは具体的にどのような要素を満たしているものなのか、それを具現化するにはどのような仕組みや人材が必要なのか、これらの問題意識に基づき、地域住民の目線で持続可能な地域づくり



を実践していくことを目的とした取組みのはじめの一歩となるのが、今回の事例です。自分たちの足元にある資源の良さを3村で体験することを平成21年度の活動（前半＆後半）として、その活動の経緯、活動内容と地域への影響（取組みの効果を含む）、ESD的視点、今後の課題について報告します。

### 2. 活動の経緯

やんばる3村においては、地域の資源を活かした様々な取組みがなされているものの、自主的かつ積極的に3村が一緒になって何かをすることはこれまでほとんどありませんでした。それはある意味、お互いの接点を意識しつつも、地域資源の活用の仕方について考え方や取組み方の違いがあり、それらに対してマイ

ベースであることやお互いの特長を認めしてきたからとも言えます。しかしながら、近年、持続可能な地域を築いていくための明確な考え方（概念）や構成要素を共有しておくことが、これからの中やんばる3村に必要なのではないかという共通の思いが、今回の協同事業を立ち上がらせました。

そのスタートとして取り組んだ平成20年度は、環境省・那覇自然環境事務所の支援を得、地域の資源を保全しながら活かしていくノウハウを全国の事例から学び、共通理解することを目的とした研修講座の実施でした。その後、年度の単発事業で終わることなく、継続的な取り組みに繋げることを目的として、平成21年度の講座の企画・運営に結びついていきました。

### 3. 活動内容と地域への影響

平成20年度の講座を終えて、参加者の皆さんが思ったのは、「今度は、自分たちに必要な講座を自分たちで作ること！」でした。つまり、地域づくりに繋がる学習機会の創造において、3村の担い手の関わり方が「参加者」から「主体者」へと変わることでした。

#### 【平成21年度前半の活動内容】

「参加者」から「主体者」に代わる第一歩として、自ら実施する地域人材育成講座の企画検討を行いました。3村協働による地域づくりの基礎となる関係性を構築しながら企画検討のノウハウを学ぶために、NPO法人国頭ツーリズム協会がNPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）に



やんばるの森を上から観察できるデッキ

企画検討委員会のコーディネートを依頼し、平成21年8月～9月にかけて計3回の企画検討委員会が開催されました。

委員会では、年度の後半に実施を予定している「やんばる地域における持続可能な地域づくり講座」について、どのような“学びあい”的な場を持つことがやんばるの持続可能な未来につながるかを議論し、具体的な講座の企画づくりを行いました。

3回の企画検討委員会（ワークショップ）は、以下のような内容で実施されました。

#### 第1回 やんばるの今と未来への思いを共有する

参加者の思い、昨年度の講座で出た課題やアイデアなどを参加者でじっくり話し合い、アイデアや思いをまずは大きく膨らましながら、委員同士の共通の土台をつくる。

##### 【講座の企画づくりに向けて共有されたキーワード】

持続可能性・こども農山漁村体験プログラム・エコツーリズム推進法にもとづくルールづくり・自然再生・雇用の機会の創出・地域の人が講師に。

#### 第2回 講座の大きな方向性（コンセプト）を決める

1回目に共有した土台の上に、誰に向けてどのような講座をしたいのかを明確にし、講座のねらいや取り組むべき要素（何を獲得する講座か）など、大きな枠組みを描いていく。

##### 【確認されたキーワード】

フィールド体験・楽しいもの・講座型、お勉強的でないもの

#### 第3回 講座の具体的要素を描く

2回目に描いた方向性に沿って、具体的な進め方やテーマ、参加を促したい住民などを具体的に描いていく。3回の検討の成果を具体化していく。

前半の企画検討委員会は、やんばるが抱える課題を明確にし、すでに行われているさまざまな取り組みの活性化等に繋がるよう、関係者の経験や知恵を持ちより、じっくりと話し合う場となりました。

3村が連携して取り組むことで、さまざまな事業が

横につながり、お互いの活動が相乗的に機能し、3村の持続可能性へつながっていくことが重要であることを確認できたのは大きな収穫でした。

3回の企画検討委員会を経て、企画された後半の講座の概要は、以下の通りです。

#### ① テーマ

やんばる3村周遊型 自然・文化体験ツアー

#### ② コンセプト

- ・3回の連続講座（導入～体験～共有）かつ各回ごとのふりかえりを含む完結性が必要

- ・親子や婦人会をターゲットに想定

- ・3村が1回ずつ、各村の資源を紹介し、相互理解を促す

#### ③ 参加対象者

小学生以上なら誰でも（小中学生は保護者と参加）

30名程度

#### ④ 実施回数

各村での体験プログラムを各1回、合計3回実施

（単発での参加も可とするが、全て参加できる希望者優先する）

#### ⑤ 参加費

無料（実費および保険料について要検討）

#### ⑥ プログラムの内容

参加者が楽しみながら、3村の自然・文化資源について

改めて学び、また各村のコーディネーターによるプログラムそのものを体験できる3時間程度の参加体験型プログラム

#### ⑦ 実施の流れとプログラム候補

	候補日	村	フィールド、プログラム候補
第1回	11月23日	東村	慶佐志マングローブ、エコパーク、農家体験など
第2回	12月6日/19日	大宜味村	タービ、ネクマチチ岳（つばき群落）、塩屋瀬カヌー体験、あい染めたい件、シークワーサー収穫、長寿食など
第3回	1月17日	国頭村	集落散策、イノー観察、ヨナハ岳、ヨナ川の森林セラピー、学びの森トレイン散策など

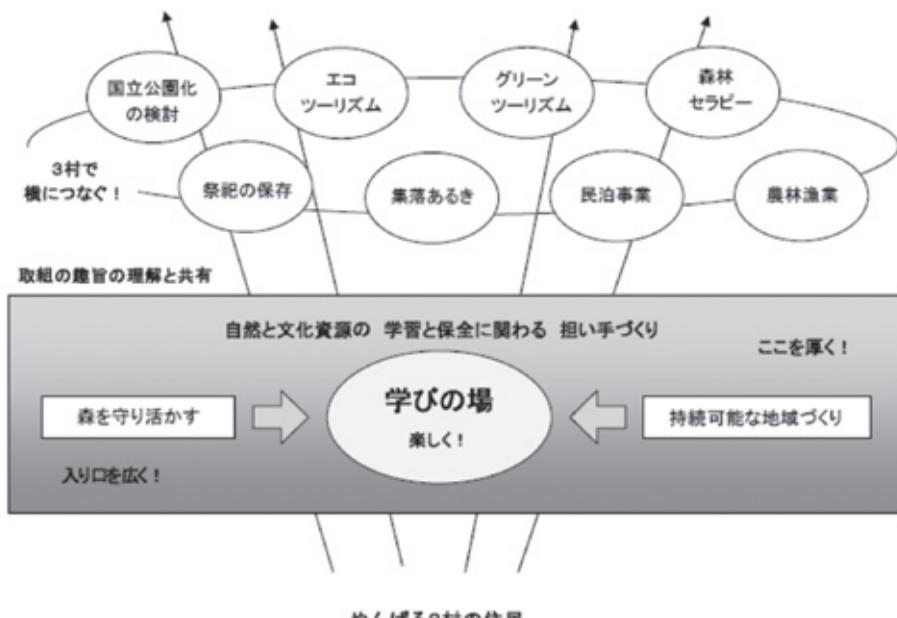
#### ⑧ 期待できる成果

- ・「持続可能の意味」「やんばるの資源」について住民が学び、気づく
- ・持続可能なやんばるに向けた取り組みの扱い手を増やす
- ・3村の継続的な情報共有と連携のしくみや体制の基盤強化
- ・持続可能なやんばるに向けた「活動」や「事業」を活性化し、つながる

#### 【平成21年度後半の活動内容】

前半の企画検討委員会で練られた「やんばる3村持続可能な地域づくり応援講座」を実施することが、

## 持続可能なやんばる3村



後半の活動です。

まず、企画委員会の名称を運営委員会に代え、前半で企画した内容の運営体制づくりを行いました。3村の地域づくり関係者（行政機関・事業者など）で構成される運営委員会※注 の事務局は、NPO法人国頭ツーリズム協会におき、各村1回ずつの講座の企画立案・運営は、各村の担当委員が中心となり、地元のインタープリター・コーディネーターを手配し、遂行することにしました。また、チラシ作成・広報（婦人会要請）・申し込み受付・アンケート作成などは、事務局が行いました。

前半で練られた企画は、さらに検討が重ねられ、プログラムに盛り込む要素として、以下の3点に整理されました。

### 【要素1】

地元3村の人たちから見ても、身近で知らないところに、実は魅力があることに気づくことができるようなプログラム

### 【要素2】

地元3村の人たちから見ても、楽しさが盛り込まれているプログラム。

### 【要素3】

その魅力や資源を、次の世代に残すためにはどうしたらよいかを、自分と関係のあることとして考えることができる。

また、講座の特長が、以下のように明確になりました。

- 体験型であり、楽しい。
- 子どもでも参加でき、親子や友人同士で気軽に来ることができる。
- 講座を企画し運営するのも、同じ3村の地域の人々である。
- 地元同士でも意外と知らない3村の各々の地域の資源を実際に見て、それを活かした体験活動をし、その現状を知ることができる。
- 講座は3回シリーズであり、3回連続で参加することで、より理解が深まる。
- 各回ごとに地域資源の保全と活用に関するアンケートを実施して、学びをふり返るとともに、今後の活動の基礎データを集めることができる

上記のような整理をし、共有した上で決まった講座の目的は、「地元3村の参加者が、地元の資源について、地元のインターパリターやコーディネーターの案内・解説を通じて体験しながら楽しく学び、その魅力を再確認するとともに保全・活用について考える」ことでした。

後半の活動は、平成21年10月20日をスタートに毎月運営委員会を開催し、事前打合せ（下見を含む）を踏まえて当日の運営そして反省会を実施しました。

やんばるの海・川・山をフィールドにして実施された全3回の各ステージは、合計94名（33名、24名、37名）の地元から参加者が集まりました。※当日の様子は、ニュースレター（縮小版）を参照。

今回の講座は、「やんばるの自然、文化資源の保全と活用に資する人材育成」を目的として実施されました。が、プログラムに前述の3つの要素を盛り込み、関係者は常にこの要素を意識し、参加者も各回ごとにアンケートを通じて、この要素についてふりかえりを行いました。以下、その3要素を切り口に、生物多様性保全の成果と課題について考察した事項を講座の報告書から一部修正して引用掲載します。

### 【要素1：地域資源の魅力に気づく】

アンケート結果によると、多くの参加者が「自然の不思議さ」、「生物の多様性」、「さまざまな植物・生物との出会い」、「身近にある豊かな自然の再発見」など、地域の魅力に気づくことができたことがわかりました。また、参加者がステージごとに、「海」（東村の慶佐次マングローブ）、「川」（大宜味村の平南川ター滝）、「森」（国頭村の与那の森）と、やんばるの異なる面に接することができ、その多様な魅力を再認識できたことは大きな成果と言えます。しかしながら、プログラムの時間的制約などから自然の豊かさの背景にある生物多様性のしきみや歴史的背景、環境変化の現状認識などについては、深めきることができませんでした。開講式において、やんばるの魅力について「ミニミニ講座」を入れるなどの工夫はおこないましたが、十分と言える内容ではなかったようです。今後は専門家によるレクチャーを取り入れるなど、より深い気づきと学びの場を創造することが望まれます。

#### 【要素2: 楽しさが盛り込まれている】

今回の講座では、参加者・スタッフの笑顔が印象的でした。楽しさは学ぶ意欲を喚起し、学習効果を高める意味においても有効であったと思われます。また、座学ではなくフィールドに出ての体験学習は五感を通じての学びを生みだし、より深い学びにつながりました。ステージ3では講座全体をふり返る時間を設け、グループごとに車座になって話し合いをもちました。参加者一人一人が自らの体験を自分の言葉で語り、学びを共有化できたことは大きかったと言えます。

今回の講座の募集にあたっては、子どもからお年寄りまで楽しめ、親子で参加できることをピーアールし、各村の婦人会に協力を依頼しました。このことにより参加者の層が大きく広がりました。今後、本講座が3村の中でより広く認知され、年中行事の中に定着されるよう、各方面に働きかけていくことが望まれます。

なお、楽しさに関連し、参加者をなごませるものとして

「食」の存在も欠かせない要素であることが確認できました。今回、東村ではスタッフのみでしたが、大宜味村・国頭村では、参加者にそれぞれ「おにぎり」・「サーター・アンダギー」を配布し好評でした。各村には多様な食文化があり、今後、「食」についてのプログラムづくりにも挑戦することが望まれます。

### 【要素3:資源の保全と持続的活用】

保全と持続的活用を考えるにあたり、アンケートをみると、参加者から「マナーや利用者の意識の喚起」、「ルールや保全計画づくり」、「ゴミ持ち帰りの徹底」、「看板設置」、「小学校の教育に取り入れる」、「入域制限必要」、「入場料をとる」、「広くアピールをする」などの貴重な意見が出されています。どれも重要な課題であり、今後の3村の活動に反映させていく必要があります。

一方で、これらの課題の解決には行政を含め関

「平成 21 年度やんばる3村持続可能な地域づくり応援講座」募集要項



全3回の講座の報告は、ニュースレターにまとめられ、参加者に配されました。

連するステークホルダーの協力が必要です。今後、ステークホルダー間の連携をとりつつ、講座の学びを行動につなげる取組みが期待されます。なお、「入域制限」に関連して、第4回運営委員会では、本講座そのものの人数制限について議論されました。講座は当初より参加者約30名の定員とスタッフ約20名の枠内で、自然に負荷の無い範囲で行うことを原則としていましたが、今回その規制が欠席者の代替や友人参加、見学参加などでアバウトになってしまった部分がありました。この点については、今後、十分配慮し、講座運営を工夫していく必要があると思われます。

## 4. ESD的視点

今回の取組みが「社会の課題解決に取り組む学び」「一方通行でない学び」「多様な人が関わり合う学び」といった視点で語られるESD的実践と呼べる理由は、以下の3点と考えられます。

- ・自分たちに必要な講座をつくるための講座企画検討委員会を立ち上げた

- ・学習のプロセスを様々な主体が連携・協働して参加型で進めていく工夫
- ・地域での課題を課題のままにせず、共同の学び合いの場を意識的にしけけ、当事者となる団体や核となるキーパーソンを確実に巻き込んで、つながる仕組みづくり

## 5. 今後の課題

今回の講座企画と運営を通して、当事者たちの信頼関係が築かれ、今後の協働作業を継続できる状況を作り上げることができましたが、以下のように、いくつかの課題も共有できました。

- ・住民の視点にたった生物多様性の概念の共有と理解をどのように図っていくか、そのモデルを作成すること
- ・事務局体制の維持（スタッフの育成とその確保、運営費）
- ・自立した事業化

## 6. 今後の取り組み

平成22年3月5日に開催された第5回運営委員会において、次年度講座についての意見交換と講座計画案の具体化をする作業を行いました。第4回運営委員会議事要旨をもとに前回までの議論を確認した後、次年度講座案づくりの作業として、以下6点を留意したワールドカフェ方式のグループ討議をへて、各グループの計画案を作成しました。その後、各案を発表してもらい、全体の討議を経て、各案の要素を盛り込みつつ、次年度講座計画案を決定していきました。

- ①年度の講座の成果(楽しさ・自然資源への気づき・保護と持続的活用)
- ②自然資源・生物多様性の保全と持続的活用について内容を深める。
- ③一般の地域住民を対象。ガイド養成講座ではない。
- ④参加・体験型を中心に、座学なども織り込む
- ⑤時期は四季を通じて、4～5回程度
- ⑥人数はキャパシティーを考慮して昨年並み、3村の在住者30～50人を想定

沖縄やんばる3村協働による持続可能な地域づくりの取組みは、地域住民による地域住民のための学びの場としてスタートラインについたばかりですが、やんばる地域における地域づくりは、「生物多様性」とESDの考え方と共に構築していくことが必然的なエリアであることには間違いないでしょう。今後の継続的な活動が楽しみであり、期待したいです。

※今回関わった3村の皆さんのお所属等は、以下の通りです。

沖縄県東村：東村エコツーリズム協会、東村観光推進協議会、東村役場企画観光課

沖縄県大宜味村：おおぎみ・まるごとツーリズム地域協議会、大宜味村役場企画観光課、村議員、農業従事者

国頭村：NPO 法人国頭ツーリズム協会、村議員、国頭村商工会、国頭村役場企画商工観光課、大学教員



大宜味村



東村



国頭村